

選者賞および入選作品

稲畑 汀子選

選者賞 綿虫

東京都 松内 佳子

綿虫の風に抗ひ飛ぶ白さ
綿虫やベンチは人を待ちつづけ
ゆるやかに旋律なして雪蛍
綿虫や人の形に人暮れて
綿虫の舞ふ頃ならむ父母の墓
綿虫に墨絵の如き木立かな
たそがれの空に詩を書き雪蛍
綿虫の夕星よりもなほ高く
綿虫や母校は今も森の中
雪婆この頃聞かぬ子守唄
別々の綿虫見遣る二人かな
大綿や家より多き墓の数
ふるさとに知る人減りて雪蛍
綿虫や夕べは堰の音高く
ゆく方の山河起伏し雪蛍

選評

「選者賞」は「綿虫」である。初冬の晴れた日などに空中にふらふら飛んでいて、ともすれば空中を浮遊している塵と間違ってみられることもある季題であるが、全編この季題を詠んでいる。「雪蛍」や「雪婆」が詠まれているので、北国の方なのかも知れないが、いずれにせよ一つの季題で連作を完成させるのは結構難しいのではないかと思われるところを見事に十五句を纏められたと思う。〈ゆるやかに旋律なして雪蛍〉〈たそがれの空に詩を書き雪蛍〉等季題を的確に描写しながら、詩趣ある表現で花鳥諷詠の完成度は高い。〈綿虫の夕星よりもなほ高く〉は金星との対話が聞こえてくるような臨場感がある。これからも季題を大切に詠み続けていていただきたい。

(稲畑 汀子)

井上 康明 選

選者賞 冬隣

山梨県 会田 繭

コンロの火匂ひて富士の初冠雪
時刻表小さくたたみて鴟日和
秋めくや小流れに沿ふ花の丈
つぎめなき空爽涼の雲ひとつ
秋風やウラジロモミの径に入る
遠嶺は空より淡し草の絮
葉擦れかすかに水楯の黄葉せり
末枯れて猪独活のなほ直立す
しんしんと枯れてゑのころ草紅し
紅葉かつ散る風音のわたる空
雲を放ちて秋雪の嶽聳ゆ
湿りたる切株秋の深みゆく
昼月の空のしづけさ冬隣
をさなごの耳をかすめて雪ばんば
初しぐれ夕餉の麵を太く打つ

選評

受賞作は、秋の深まりとともに爽涼の大きさが澄み、やがて山には雪が降り、綿虫が舞う冬を間近にした情景を描く。おのずと山国に暮らす人ではないかと想像した。殊に紅葉が終わって冬に近づいていく静けさが印象深い。〈つぎめなき空爽涼の雲ひとつ〉〈紅葉かつ散る風音のわたる空〉などは、見上げる空を連続する空間として把握、リズムに乗せて滞ることなく表現している。同時に、〈遠嶺は空より淡し草の絮〉〈雲を放ちて秋雪の嶽聳ゆ〉は、山岳とその麓を遠近に捉え、秋の大きな風景として描く。一方、〈秋風やウラジロモミの径に入る〉〈しんしんと枯れてゑのころ草紅し〉は、秋から冬へかけて自然の風景の変化を冷ややかな静寂とともにたしかに捉えている。

(井上 康明)

宇多喜代子選

選者賞 吾も風

埼玉県 浜田はるみ

数へ日の橋より落暉見てをりぬ
人と会へぬ日白菜の口縛る
大白鳥つばさを広げ朝日割る
トラクター県道をゆく雨水かな
積載量二トンを蝶の躲しけり
春月や真夜中に載る体重計
ガラス壘残らず洗ひ梅雨に入る
花あふち祈りのための石置かれ
出でし穴へ挽歌のごとく蟬しぐれ
バス停の防災無線鳥渡る
蛸や森に満ち干のあるごとく
赤とんぼ静かに日暮れ連れてくる
花すすき揺れて虚空の透明度
蘆原に全身没し吾も風
はつふゆの翅を持つもの光曳く

選評

〈人と会へぬ日白菜の口縛る〉の「人と会へぬ日」はコロナ禍かもしれませんが、〈数へ日の橋より落暉見てをりぬ〉〈蘆原に全身没し吾も風〉などから、コロナ云々とは無縁の人と会わないひとりの世界を表現しているところに目を止めました。

〈トラクター県道をゆく雨水かな〉〈積載量二トンを蝶の躲しけり〉など、農事の現場が生き生きとしています。〈蛸や森に満ち干のあるごとく〉の「蛸」ならではの説得力、十五句中、もつとも惹かれた句です。

(宇多喜代子)

大串 章選

選者賞 多島海 三重県 松本 愛子

それぞれに島山笑ふ多島海
春潮や誓子の詠みし子持島
英虞湾の真珠筏や麗けし
鱒東風九鬼水軍の大漁旗
桜まじ展望台より志摩の海
夏潮の象嵌細工リアス湾
鮑海女男波を蹴りて直ぐ潜く
台風来漁船を舫ふ細江かな
鎮魂の潮騒の浜三島の忌
浜小春島に唯一の診療所
遠景も近景も海牡蠣育つ
水軍の裔にて牡蠣を打ちに打つ
首塚と胴塚対峙冬怒濤
寒潮の群青寄する岬灯台
島の路地干物の臭ふ年の暮

選評

多島海は多くの島が点在する海。志摩半島南部の英虞湾には約六十の小島がうかぶ。この「多島海」十五句を読むと島々の暮しや歴史が脳裏をかけ巡る。〈英虞湾の真珠筏や麗けし〉―海原に浮かぶ真珠筏を彷彿とさせ、真珠養殖に励んできた島の歴史を思わせる。〈鱒東風九鬼水軍の大漁旗〉―水軍の裔にて牡蠣を打ちに打つ―嘗て威力を振るった九鬼水軍の末裔が漁業に励む姿を彷彿とさせ、歴史の流れを思わせる。〈春潮や誓子の詠みし子持島〉〈鎮魂の潮騒の浜三島の忌〉―山口誓子の俳句〈春潮に飛鳥はみな子持島〉、三島由紀夫の著書『潮騒』（新潮社文学賞）を思わせ、島々と文学の繋がりを示唆する。「多島海」はスケールの大きな魅力的な一連である。

高野ムツオ選

選者賞 工事

東京都 鈴木 朗

春の星点し鳶職去りにけり
鉋屑掃けばまじれる落花かな
やすやすとクレーン躲す燕かな
削岩機止まれば遠く祭笛
炎帝にひれ伏し一日舗石敷く
炎昼や鉄管ビールわれ先に
夕仕舞砥石を浸す水も秋
秋天へ吊り上げらるる鬼瓦
見習ひを夜学教師が訪ひくるる
熔接の火の粉降りくる夜食かな
鳥渡る出稼ぎの衆来る頃か
小春風柄の刻みを子に教ふ
棟上げの弓オリオンを待てりけり
饒舌一人寡黙十人缶焚火
丹念に鋸目を立つる二日かな

選評

建設や建築の仕事を日常としている人の、その現場に取材した、生活感あふれる一連であった。都市農村に関わらず社会で働く姿を詠うことは俳句の大切な一面である。本作品は、確かな表現力によって、その時々場面が鮮明に切り取られた句が多く、現代性も感じられた。〈鉋屑掃けばまじれる落花かな〉〈夕仕舞砥石を浸す水も秋〉〈溶接の火の粉降りくる夜食かな〉〈饒舌一人寡黙十人缶焚火〉など季語の力も十分に働いている。

(高野ムツオ)

入選作品

入選作品

※十五句のうち、十句を抄出しました。
都道府県別五十音順に掲載し選者を一連
の末尾に記載しました。

海へ

北海道 久保田哲子

船板を焼く煙なり鳥雲に
海風いで破船のやうに春の雲
鹿の角落ちて風なききのふけふ
とほき日の絵本開けばてふてふとぶ
覗きぬし少年老いむ青みどろ
ひとかどの毛虫となつて驚かす
出演のおほかた故人金魚玉
麦の秋夫を離りて泳ぎけり
ポケットの広きを愛す夏の海
海原へ一氣にひらく青簾

(井上康明・宇多喜代子選)

実万両

福島県 可笑式

耕のなかを一両それつきり
子を送るいつもの道が春の道
合奏の譜面ひからせ花菜風
常節の食ふ数ほどを湯へ放る
青葉木菟はげしくならずおとろへず
幟旗なびかせてゐる夏の川
野馬追の坂駆け登る少女武者
空蟬のかずあめつちのこゑのかず
一本の向日葵だけの更地かな
ふるさとの踊の癖のまま踊る

(井上康明選)

被曝の町

福島県 今野 金哉

雪女さまよひ歩く津浪跡
しんしんと雪降る被曝の町一つ
雪の上にまた雪積もる仮設棟
若布舟浜の復興遅々として
子の消えしふらここばかり除染中
津波禍のここも花野となりにけり
新涼や汚染の土の生乾き
海の辺に傾ぐ墓標や葎の花
鮭戻るセシウム汚染の町の川
津波禍の車両を覆ふ枯葎

(大串 章・高野ムツオ選)

風の片影

埼玉県 河瀬 俊彦

風ひかる窓開け放つ分教場
さざ波に星の生まるる春の海
定位置は二番セカンド若葉風
風薫る森を抜ければ海の音
風に揺れ風に負けざる秋桜
尾根道の小風のうまき松虫草
砂山に風の足跡冬に入る
綿虫の空に螺旋のあるやうに
さざ波に少し遅れて浮寝鳥
虎落笛ラジオを友の四畳半

(稲畑汀子選)

いのち

埼玉県 菊地 英

花種のかすかな温みたなごころ
腕組んでちちは来さう花月夜
花吹雪浴びて病む身をよろこばす
マスクメロンどかと退院祝ひかな
寄せ植ゑの炎となりて鶏頭花
萩の花括るに支柱二本立て
色変へぬ松貫緑の枝の張り
妙齡の指美しく蜜柑剥く
家族みな揃ひ聖樹の星灯す
冬枯の草にいのちのありにけり

(宇多喜代子選)

癌闘病

埼玉県 高橋風和里

春の野辺橋なき川の岸に立つ
癌に挑む明日も輝け春北斗
腹決める旅は西方彼岸西風
ちいさな青空癌病棟に春兆す
亀鳴けよ眠れぬ夜をもてあまし
病棟の窓流れゆくぼたん雪
もののけの花影の濃き闇に入る
春昼や見舞の人の手の優し
春の果残り香淡き病衣ぬぐ
癌の癒ゆる香る新茶に里の菓子

(大串 章選)

この町

東京都 北原 芒子

菜畑を手入の夫婦秋うらら
鶴鴿や枯色の野を飛び跳ねて
早足を止むる十字路金木犀
明月や警官の礼かくしやくと
新装の店は小作り実千両
川風に傾ぐすすきの輝ける
霜降やだらだら坂をペダル漕ぎ
秋澄むや門扉を飾る花深紅
気負はずにこの町に生き初紅葉
晴天に小型機の音黄落期

(稲畑汀子選)

地球

東京都 敷島 一洋

春風に来るかと言へば蹤いて来る
ののさまと呼んで眺める夏の月
夏の海煌めくプロメテウスの火
群立ちて思ひ思ひに赤蜻蛉
風化する時代の記憶月見草
津波碑に手向けてありぬ野菊かな
地は暗し海は明るし鳥渡る
氷河時代ありし地球に草いきれ
青芝のやんはり地球の踏み応へ
青年の間ひ二千年星月夜

(高野ムツオ選)

多摩逍遙

東京都 庄嶋 里子

城跡は黄葉を急ぐ森の奥
遠き世の空濠灯す烏瓜
綿虫の過去へいざなふごと流れ
城山をそぞろ歩けば秋意満つ
水細き水車の音も秋寂びぬ
枯芝を行けばたつぷり日の匂ひ
掃かずおくことももてなし庵落葉
朴落葉日を掬ひつつ足許へ
拾へとや詩箋の如き朴落葉
冬めいて薪割る音や多摩の里

(大串 章選)

海神

東京都 曾根新五郎

元旦の太平洋で顔洗ふ
海神の太平洋の淑気かな
初漁の船海神へ向かひけり
海神の総身のかけら櫻貝
これ以上青くはなれぬ島の夏
海神も黙す八月十五日
海神の口へ飛びこむ流れ星
長生きの母とふたりの島の秋
海神の寒月光の雫かな
生きてゐる限り海みて年惜しむ

(井上康明・高野ムツオ選)

里曲の風

東京都 高橋 喜和

万物を海へ送りて川涸るる
地下足袋のこはぜの細か冬田打つ
獵期来る背負に括る守り札
飲食はつくづく香なり根深汁
草若葉仔牛の膝は泥まみれ
一面はかたかごの花山祠
遠足の列走り出す乗換駅
山容の挟む一川秋気澄む
古来種を残し蘆原刈り進む
藁塚のにはひ里曲の風に乗り

(宇多喜代子選)

降りみ降らずみ

東京都 樋口 昇る

八つ橋を鴉歩くや木の芽雨
振り向けば飛鳥山へと花の雨
桜しべ降るや石神井川速し
鳩の子のきよとんとしたる天気雨
すぼめたる傘をかすめて黒揚羽
時ながれ雨に葛咲く砦跡
木の実降る父と拾ひし日の如く
仰ぎ見るメタセコイアにみぞれかな
お降りや岸辺に老いの深呼吸吸
降るほどの星にふくろふ啼きにけり

(稲畑汀子選)

女神の島

東京都 矢野みはる

釣果など覗きつつ行く春なぎさ
貝寄風や埠頭に雑魚の乾びゐて
風光る女神の島へ渡る舟
春月にウエットスーツ吊られけり
みんなみや島の一日はじまりぬ
緑蔭を鳩の飛びだす大道芸
鳥渡る橋は欄干より古りて
裏磯へまはれば石路の花明り
断崖は人をとほざけ鴛とぶ
マフラーをきつく離岸の最終便

(井上康明選)

帰郷の色

東京都 吉田 祥子

山並の見えぬ地に住み後の月
蓑虫の蓑に一筋青き枝
菊枕玉留めに香の立ち上り
鳴眠る方位磁石の針のごと
神輿蔵並ぶ裏道雪ばんば
吾の影銀杏落葉に彩られ
海一枚遠く光りて笹子鳴く
枯葉踏む波打ち際を歩むごと
冬の蠅ふんといのちを鳴らしけり
雪晴や影伸びらかに猫車

(井上康明・宇多喜代子選)

仕事

神奈川県 松下 宏民

麦踏の誰彼無しに俯ける
白子干す弓手に馬手に湯気絡み
桜桃忌水あふれさせ甕洗ふ
朝市を終へタ市の瓜冷やす
稼ぐ手の緻密な皺や日に焼けて
棚経僧汗も拭はず帰りけり
手拭ひで身の塵払ひ秋収
冬耕やときに鋼の音を生み
みささぎへ尽きる小径の落葉搔く
餅焙る宿直室の夜の静寂

(宇多喜代子選)

秋灯

愛知県 篠田 篤

雛の目は面相筆のひとさすり
告白はバレンタインの日に延ばす
アマリリス指で拭き取る葉の埃
本堂に置く業務用扇風機
ふいに止む噴水を皆振り返る
つゆ草にそぞろ歩きの脚濡らす
疫除けのマスクも錦七五三
木枯に吹かるる襟が頬を打つ
何処にも急ぐものなし初景色
手毬唄最後は背で毬を受く

(大串 章選)

淋代の海

愛知県 水野 幸子

玫瑰の実にみちのくの海の風
師の声の聴こゆる葡萄棚の下
鬼の子に妹がゐて兄のゐて
子別れの鴉に夕日惜しみなく
楽しげに逃げてゐるなり稲雀
少年のひとり遊びの瓢の笛
十二月八日の冬の鴟猛る
眠るまで稚あやしをり雪女
雪降るや父の手紙のながながと
淋代の海はるかなり冬銀河

(高野ムツオ選)

脳内地図

三重県 石井 洋子

砂に座し魔除けの呪文祈る海女
脳中に海中地図や潜る海女
磯笛や生き死にの業くり返し
磯鑿を返せば光る黒鮑
平潮の底の速流海女泣かせ
一瞬の眼力走り鮑捕る
海女浮上息の限界吐き尽くし
底潮の冷たさ語る鮑海女
海女上ぐる滑車全身にて引けり
火の団欒海女の素肌に湯気の立つ

(高野ムツオ選)

国境の島

京都府 亀山みか月

ジャンパーの太指の挽ぐ乗船券
乗船も下船も冬の雨の中
国境の島にシヨールを巻き直す
ハンゲルの溢るる島の石落の花
罌綱を解いて乗り込む冬帽子
冬灯小さな船の漁仕度
凍星や漁船出でゆく午前四時
暁の冬の海へと又一艘
里神楽鈴の音強く漢舞ふ
防人の血の染みし島帰り花

(高野ムツオ選)

川の底

大阪府 和田 燐子

鉄橋の一両電車初日さす
うららかや山を沈める川の底
穏やかや地蔵の護る花の土手
水音の力抜く堰秋立てり
数珠玉の揃ひの腕輪腕を組み
秋夕焼朝の晴を疑はず
体育の日女教師のにぎり飯
ふいに出た蛇の長さを目で計る
枯芦や橋の半分だけの影
初鴨の活気にふゆる川の水

(稲畑汀子選)

十五色のパレット

兵庫県 藤井 啓子

早春の空よりこぼれ水の色
金の瞳の母より銀の瞳の子猫
万緑や仔牛の斑のくつきりと
水替ふるたびに目高の透き通る
疲れたる街を洗ひし白雨かな
まだ青き実を落したる初嵐
秋時雨ひと色足して版画摺る
ひと山を越せばなほ濃き野紺菊
詫び状は黒のインクで漱石忌
龍の玉シルクロードの娘の瞳

(稲畑汀子選)

月天心

和歌山県 雑賀 絹代

待宵やいつもの椅子を庭へ向け
竹林の葉擦れのとどく月今宵
紅茶派も珈琲党もゐる良夜
香薰いてひとりの部屋の無月かな
月さして身の内どこか醒めてをり
獣園は熟睡のころか月天心
焙烙をゆすり夜長の始まりり
穂芒の全長を挿す蛇笏の忌
秋惜しむ夜間飛行の灯が流れ
寝入りても耳立てる犬霜の声

(井上康明選)

江田島

広島県 藤谷 知子

古木なる桜冬芽の兵学校
うそ寒や大講堂の石造り
古鷹山に鍛へし日々や虫の声
兵の遺書見て来しよりの秋思かな
塗り直す古き館や島小春
剝落の白亜の館秋日濃し
落葉踏む音に驚く砦跡
砲台の遺構で食べる島みかん
猪の荒らしてをりぬ堡塁跡
牡蠣筏縫うて舟出る島の秋

(井上康明選)

赤子の目

香川県 涼野 海音

空に紛れず新涼の風見鶏
七夕の展望台に逢ひにけり
家々は灯の色だがへ星祭
石蹴りの声いつまでも終戦日
転職をせし日は遙か鰯雲
わが服を畳む母の手虫の夜
冬に入るかしこさうなる赤子の目
ゆつくりと牧師歩いて帰り花
綿虫の牛小屋抜けてゆきにけり
ふと父の匂ひのしたる年の市

(稲畑汀子選)

春秋

愛媛県 堀本 芳子

秋千や心の刺の溶くるまで
こころざし半ばの遺品春夕焼
満開の花の忌日となりにけり
花の寺二人で願ふこと一つ
青蔦や君の匂ひの広辞苑
延命はせぬとの誓ひ秋澄めり
遺言はあの日の会話曼珠沙華
三代の卯年の家族初座敷
子と夫の並ぶ遺影や白障子
夫逝きて山へ返す地寒昂

(大串 章選)

息吹

福岡県 田村 靖子

水底に泡立つ息吹春きざす
蝌蚪の紐犇き合うて水暗し
白梅やきらりと鳥の枝移り
遠灘の鈍きひかりに山を焼く
花冷の百の横穴こだま棲む
早苗束投げては空へ弧を描く
水面刺す影濃き早苗蜻蛉かな
蛇の首ゆく藻の水のぬめりけり
天山の霧に飼はるる黒き鯉
葛の花蛇籠の石のくろびかり

(宇多喜代子選)

水のある風景

大分県 押谷 隆

一枚の水平らなる初明り
み仏に赦され水の温みけり
水昏れてともす菜の花明りかな
湖に出て水面を走る青嵐
水音のいつも近くに明易し
おもむろに水を離るる蛍かな
水に沿ひ水音に沿ひ秋涼し
水の辺のベンチは二つ草紅葉
みづうみへ道まつすぐや暮の秋
極月の水は明日へ続きをり

(大串 章選)

風物語

大分県 川野 智子

春シヨール風に寂しき悟らるる
風五月ぴくんと動く猫の鬣
泰山木風の高さに花ひらく
エプロンの帆を膨らます青葉風
飛び跳ねて子らは花野の風になる
金色の風解き放つ夕芒
やはらかな風のふところ花芒
中也詩集また秋風に捲らるる
木の実降る風物語始まれり
秋風やきれいな涙すぐ乾く

(稲畑汀子選)